

## ル・コルビュジェのトリッキーな開口部

建築のデザインは開口部の納まり一つでガラッと表情を変えてしまう。技術が発達した現在でも、われわれ建築家はこの開口部に悩まされ、そしてどれだけ空間を支配しているかを思い知らされることが多い。建築の開口については、以前『建築の言語』[\*]で記述したことがあるが、開口部にはその時代性と地域性が如実に表現されることから大変興味深い。

ここに挙げるル・コルビュジェの開口2題は、1つは「スイス学生会館」(1930~32)のサッシと取り合う外部シャッター、もう一つは「パリ救世軍難民院」(1929~33)のガラスブロックの開口である。初めてル・コルビュジェの作品を見に行った時にはあまり気にならなかったが、4~5年前に再来した時に気になって写真に撮ったデイテールである。21世紀の現在からすると、2つとも気密性や水密性の問題などいろいろと指摘するところはあるが、2つの作品に見るこのアイデアはなるほどと驚かされるものがあった。

「スイス学生会館」の引違いサッシの前に付いた“外部遮光シャッター”は、現在でもヨーロッパを訪問すると、外部シャッターや外部ブラインドによって遮光や遮熱をしている建築を多く見かけるが、サッシと一体になったブラインドシャッターがこれほどまでに薄く、ミニマムに納まってちゃんと機能していること（ほとんどが壊れていたりする例が多いが）に感心した。実は、竣工時の写真を見ると、この外部遮光シャッターは付いていないので、改修の時に後で付けたものであろうが、ル・コルビュジェのガラスのファサードを壊さないようにシャッターボックスがインテリア側の天井の中に隠された設計になっている。

もう一つの「パリ救世軍難民院」においては、ご覧の写真のとおりガラスブロック自体が横軸回転の開口となっているもので、閉じている部分を見れば分かるが、かなりトリッキーな納まりである。壁でありながらも光を採り入れるガラスブロックのスキンが、見事に風を通す開口となったデイテールで、思わずシャッターを押してしまった。\*

[\*]『建築の言語 (ヴィジュアル版建築入門5)』(ヴィジュアル版建築入門編集委員会編、彰国社 2002)

いまむら・まさき——建築家・日本大学 教授/1953年生まれ。1979年、日本大学大学院修了。今村雅樹+TSCAを経て、今村雅樹アーキテクト設立代表。現在、日本大学理工学部および大学院教授。  
主な作品：ヨックモック青山カフェ (1991)、太田市総合ふれあいセンター (1998)、西志志町保健福祉センター「ふれあい館」(2002)、太田市立沢野中央小学校 (2002)、puca puca (所沢・優々の森保育園温水プール) (2005) など。



上——スイス学生会館 外観  
下——内部から見た外部シャッターの操作部分



左——パリ救世軍難民院 外観  
右——ガラスブロック開口デイテール